文化

'87回顧 県内

美術

多かった異色の展示会

美術、写真など案内状200通超す

稲嶺成祚

十二月十日までに筆者にきた美術に関する案内状が百七十余通、写真や書道、工芸関係を加えると優に二百通を超す。年々展示会が増えていくのを実感する。

今年のもっとも異色な美術展は、那覇市民ギャラリー開設を記念して開かれた「那覇近現代美術展」であろう。明治、大正に那覇で生まれ、あるいは育った作家たちの絵画、書、彫刻などを展示したのだが、戦後活動した作家たちの作品はともかくとして、戦前の作品が発掘され、公開されたことは大変意義のあることだと思った。うわさにはきくが、作品そのものを目の当たりにするのは初めてというのが多かったからである。戦後のものとなると隔世の感があり、この作家がかつてはこのような作品を描いていたのかといった感慨を強くしたものである。そういう意味では、美術館の必要性を浮き彫りにした展覧会ではあった。

異色ある個展も今年は多かった。立体化、あるいはオブジェ化された平面とでもいうべきものに、宮城明の壁にかけられた立体作品、伊江隆人の彫られた文字、砂川喜代の布、山内盛博のSUKIMAシリーズなどがあり、平面化されたオブジェというべきものに、仲間伸恵の紙による作品があった。会場全体を作品化したものとしては、画廊匠での安谷屋美佐子の仕事が成功したように思う。その他にうごめく奇怪な小動物を思わせる奥田実のクレイワーク、高橋渉二のエロチックなオブジェ、現実空間との交渉を試みた金城繋の作品も異色のうちに入る。

次に印象に残った個展をあげたい。まず抽象的傾向のものとして才気煥（かん）発、巧みな画面処理をみせたウエチ・ヒロや大浜英治、知名久夫、金城満、華麗な幻想空間を描いた吉永ます子、ノーブルな画面の青山映二、三百号の大作を飾った城間喜宏、破壊された人間像を描く喜久村徳男、アンフォルメルの抽象に転身した大湾宗弘らの個展がカンこもった見ごたえのあるものとして記憶に残る。

具象的傾向のものでは、牧歌的な新垣正一、それにモダンさを加えた与儀達治、白い壁を描く豊里三智恵、精緻（ち）な形態から光への移行を示したファーロック・シャイエステ、現代的モチーフで幻想性をもたす川平恵造、空間の広がりにテーマを変えた与那覇朝大らの仕事があった。

彫刻では、二つの会場を埋めた能勢裕子の個展。ロダンばりの具象でも形態の厳しさを追究する抽象でもなく、華やいだ装飾性をもつ木彫の数々はユニークだった。個展ではないが、丸山映の宜野湾市制二五周年記念碑や西村貞雄の那覇市民体育館前に立つ「あけもどろの乙女」なども今年の収穫だろう。

グループ展では、「交差展」で直線と不定形による連作を発表した宮城一夫、「方の会」永津禎三らの仕事があげられる。

今年は新人の台頭も目立った。エネルギッシュな制作で広い会場を二度も埋めた渡名喜元俊、中世的雰囲気を漂わせたエッチングの大野加那、版画部門で沖展賞をとった山城茂徳、和風抽象を試みた上地陽子、スペイン帰りのウルカトム、キャンバスに木炭のみで描いた知花均、立体派的作風を加味した桑江良健や比嘉美津子らである。

国外、県外の展覧会への入選、入賞も例年と同じく盛んだったと思われる。以前と違って、今ではそれほどのニュースとはならないので詳細は分からない。そうした中で、横浜市民ギャラリーで開かれた「今日の作家位相展」への出品を依頼された能勢孝二郎と豊平ヨシオの場合は、沖縄での前衛的仕事が認められたものとしてのグッドニュースといえよう。

沖展、県展も、例年通りのにぎわいを見せた。詳細を省いて、ここでは受賞者のみをあげる。

沖展・絵画―「沖展賞」金城満、「奨励賞」照屋方理、宮城鶴子、北村英子、金城準子、「準会員賞」浦崎彦志

彫刻―「奨励賞」上江洲由郎、崎枝静子、かみちままさ、当間勲、「準会員賞」津波古稔

版画―「沖展賞」山城茂徳、「奨励賞」大城勝、「準会員賞」瑞慶山昇。

県展―「知事賞」島袋喜代子。「優秀賞」伊良部恵勝、金城準子、知名久夫、山田武。

今年は本格的な画集が二冊発行された。新城征孝の「新城征孝の世界」と、糸数正男の画文集「馬追原の十五夜」である。両人とも画集発行とともに画集発行記念展も開いた。

あと二つ、那覇市民ギャラリー開設記念展の作品をまとめた「明治・大正生まれの作家たち」も、今年の見落とせない刊行物である。出品作品の図版はもちろんのこと、作品目録、作者の顔写真や経歴、解説などがあり、貴重な資料となっている。

（琉大教授）